地域素材を生かした商品開発を行い社会貢献を学ぶ起業教育

仙台市立柳生小学校　５学年
小熊　信治　高久　由佳
朝倉　浩一　佐藤　哲也

１　はじめに

柳生（やなぎう）小学校は、仙台市の南部に位置し、平成12年４月に開校した仙台市で一番新しい学校である。「未来を拓くたくましい児童の育成」を学校目標に掲げ、学校づくりを進めてきた。「起業教育」は、その過程で実践してきたものである。

２　活動のねらい

(1)柳生和紙やハーブを使った商品を開発し、販売する体験を通して、創造性、チャレンジ精神、問題解決力等のある児童の育成を図る。

(2)ホームページを作ったり、商品のプレゼンテーションをしたりして、コンピュータの活用能力を高める。

一番町での販売体験学習

３　活動について

本学年は、４クラス、男女ほぼ同数の合計１２５名の学年である。今回の柳生和紙やハーブを使った商品作りや販売活動に対しては､60%以上の児童が期待感をもっていた。

平成13年度**柳生子ども塾「バーチャルカンパニー」**の実践を生かし、「みんなで創ろう！柳生キッズファーム」のテーマのもと、起業教育に取り組んだ。

柳生子ども塾

開校初年度の平成12年、本校児童を対象に開設した児童向け生涯学習講座。課外の時間に希望者を対象に実施。講師は、本校職員の他に、地域住民が無償で務めている。内容は、大きく分けて３つあり、茶道、生け花などの伝統文化、リース作り、合唱、卓球などの生活を楽しくする講座、そして、児童の力を伸ばす講座である。

「バーチャルカンパニー」

児童の力を伸ばす講座として平成13年度に開設した。東北経済産業局等の協力を得て、企業の社長を講師に迎え、本校職員がサポートするという形で、月１回２時間程度の講座を約１年間行った。**柳生和紙**を素材に商品を開発し、ネット上で仮想販売する（買いたい商品に投票してもらう）という起業教育を行った。活動の様子は、地元テレビ局や全国紙にも取り上げられ、全国の中小企業経営者から、「子供たちの笑顔に勇気づけられた。不況に負けないでがんばりたい。」などのメールをいただいた。

柳生和紙

伊達藩以来四百年の伝統をもつ。本校の卒業証書にも使われている。しかし、今では、柳生和紙を作っているのは７０歳代の佐藤平治さん夫妻ただ一軒だけとなってしまった。佐藤さん夫妻で、和紙の製作で手一杯である。現在では、柳生和紙は、地元の和菓子屋の包装紙として使われているだけである。

今回の取り組みは、「公立学校でもすぐに取り組める起業教育」を目指し、以下の５つのの柱を立てて、実践した。

(1)**地域素材を生かした学習をする**

地元の柳生和紙やハーブ（学校の近くにハーブ園があり、その指導を受け、学童農園で育てた）を素材に、商品を開発し、販売する学習を行った。

(2)**コンピュータを道具として自在に活用する**

企業へ電子メールで質問したり、インターネットで調べ学習を行ったり、ホームページを作ったりするなど、道具として積極的に活用した。目的をもって、コンピュータを利用することにより、「コンピュータを学ぶ学習から、道具としての使う学習」への質的転換を図った。

(3)**地域住民の組織との連携する**

平成13年度のバーチャルカンパニーを機に発足した保護者による「柳生和紙プロジェクト」に、授業への支援、区民まつり等への共同出店、材料の安価な提供等のご協力をいただいた。

(4)**日常の学習を生かす**

図工や家庭科の授業で学んだことを生かし、商品作りを行った。実際の販売の場面では、国語や社会科での発表の経験が生かされた。

(5)**収益で社会貢献を学ぶ**

公立学校で販売体験学習を行う場合、収益の使い方をどうするかの問題は、重要である。今回の収益については、一番町商店街の有志が中心になって運営している「仙台光のページェント」に寄付し、財政難の地元のイベントを盛り上げたいと考えた。

４　単元の構成と時間配当（抜粋－２７時間）

(1)クラスごとに会社を設立する。（２時間）

・会社の名前、方針、シンボルマーク等について話し合う。

・仕事上の役割を分担する。（社長・宣伝部長・HP担当部長など）

(2)商品企画会議・試作を行う。（４時間）

・柳生和紙やハーブを生かした商品の原案を練り、試作品を作る。

・会社内で意見を交換しながら、納得のいく商品ができるまで試作を行う。

(3)第1次商品審査会を行う。（３時間）

・ポスターセッション方式で各社の商品審査会を行う。コストパフォーマンスの面からと商品の魅力度の面から審査し、ワークシートに記入する。

・互いに見合い、刺激し合うことで、自分たちの活動や商品を見直すきっかけにする。

(4)再度商品企画会議を行い、改良を加えるなどして、商品を完成させる。（４時間）

(5)ホームページを作る。（５時間）

・これまで学習してきたパソコンの技術を生かして、会社ごとにHPを作成し、パソコンでのプレゼンテーションを行うための準備をする。

(6)第２次商品審査会を行う。（３時間、本時はその１～２時間目）

・第1次の時と同様に審査会を行う。パソコンでのプレゼンテーションを行う。

児童が考案したマーク

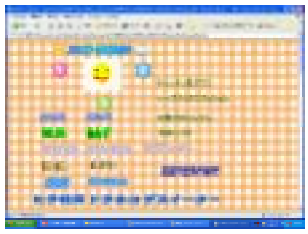
・審査結果を集計し、分析し、今後の活動方針を立てる。

(7)商品を仕上げる。（４時間）

・(6)の集計結果を、最終的な商品作りに生かす。

(8)商品を販売する。（２時間）

・会社ごとに販売戦略を工夫した上で体験活動を行う。



児童の作ったホームページ

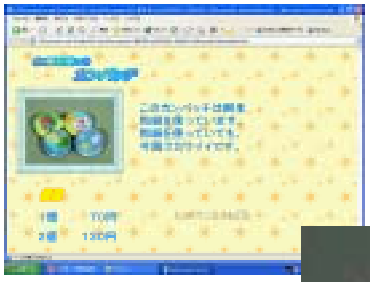
5　本時の活動の様子

(1)ねらい

・自分たちが工夫して作った商品を、コンピュータでプレゼンテーションしながら、発表することができる。

・他の人の評価を参考に、よりよく商品を改良しようと考えることができる。

(2)活動過程

学習内容	児童の反応
1　本時の学習内容を確認する。 ・第２回商品審査会をしよう	・大きな声で工夫したことをわかりやすく発表しようと思います。
2　発表、審査の手順を確認し、発表の仕方、審査する観点について確認する。 ＜発表側＞　＜審査側＞ ・会社名　（商品について） ・方針　・買いたい度 ・メンバー　・コストパフォーマンス ・シンボルマーク（発表について） ・商品　・声の大きさ ・値段　・分かりやすさ ・特徴　・ホームページの完成度	 商品のページ ホームページを使ってプレゼンテーション
3　ポスターセッション形式で、会社ごとに発表、審査に分かれ活動する。 ・発表側は、時間の許す限り商品の説明や審査側の質問などに対応する。 ・審査側は、商品について疑問に思ったことなどを質問する。	・値段はどうやって決めたのですか。 ・材料費は、どのくらいですか。 ・どんな工夫をしたのですか。
4　結果をもとに会社ごとに話し合う。	・値段を下げた方が良さそうだ。 ・厳しい意見が多いな。 ・コストパフォーマンスはいい評価だ。
5　受けた評価、話し合った結果を発表する。 ・発表が良かったという評価は？ ・説明がよかったという評価は？ ・商品を改良しなければならないと思った会社は？	・７社の社長が挙手。 ・８社の社長が挙手。 ・多数の会社の社長が挙手。

6　成果

年度末にまとめた子供たちの総合文集から、感想をひろい、成果をまとめてみたい。

○深まった地域理解、郷土愛

「（和紙すきをした時）手が冷たすぎて、こおっちゃいそうだった」「平治さんたちが紙すきを大切に思ってがんばってきたから、もっと多くの人に柳生和紙を知ってほしい」→地域素材を商品化するカリキュラムを組んだことで、地域理解が深まり、郷土への愛着が深まった。地域学習を生かした起業教育は、全国のどこの学校でも可能であると思う。

○商品開発、販売体験から学んだこと

「商品を作る時には、何を作るかなやみました。なやみになやんで○○に決まりました」「いろいろなアイデア出して、いろいろケンカしたりしてやっとできた商品」「（商品審査会で大人の人に）ちょっときついことも言われたけど、学校が終わっても友達の家とかに集まったり学校に早く来たりして商品を作り上げていきました」→商品を開発するという課題に、子供たちは、一生懸命取り組んだ。時には友達とケンカをしたりしながら、なんとかコミュニケーションをとり、チームワークの大切さを学びながら商品を完成させた。

「この学習で大切だと思ったことは、みんなが協力して一つの物事をやり遂げることだと思いました」

○学ばせたい社会貢献

「売上を光のページェントへ寄付して役立ったのでいい気持ちでした」「今年の光のページェントは、去年よりも光輝いて見えました」「（自分としては）一番最初に寄付したのが光のページェントです」→活動で得たお金では、ぜひ、子供たちに、社会に貢献するすばらしさを学ばせたい。

○起業教育は総合的な学習

「販売を始めたらお客さんが来なくて泣きそうになりました」「逃げ出したい気持ちながらやっていると・・・」→子供たちは、厳しさを感じながら、何とか状況を打開しようと必死に活動した。「がんばって大きな声を出したので、のどもいたくなったけど、みんなが笑顔で買ってくれたのでうれしかったです」→今回の起業教育の総合学習から学んだことは、少なくなかったようだ。

大きな声で市民に呼びかける子供たち

「『作る』て何？それはただ物ができるのではなくて、そのできた物が何かの役割を果たさなければ『作った』ことにはならない」「総合という授業は、その人の『総合』の能力が試される授業だと思う」

7　課題

○商品の完成度を高める難しさ

○材料費、コストの問題